Short ショートコメント ★★★★

私たちが光と想うすべて
(All We Imagine as Light)

2024 年／フランス・インド・オランダ・ルクセンブルク合作映画
配給：セテラ・インターナショナル／118 分

2025（令和 7）年 7 月 28 日鑑賞　テアトル梅田

Data　２０２５－６８

監督・脚本：パヤル・カパーリヤー
出演：カニ・クスルティ／ディヴィヤ・プラバ／チャヤ・カダム

みどころ

カンヌをはじめ多くの賞レースを席巻した本作は、是枝裕和監督も「カンヌ映画祭で出会い　本当は自分だけの宝物にしておきたいけど　こっそりお勧めします。傑作です。」と大絶賛だから、こりゃ必見！しかし、そのタイトルは一体ナニ？

インド映画は「歌って踊って！」が多いが、本作はまるで異質。「どんなに長く暮らしていても、故郷と呼ぶには気が引ける」というインドの大都市ムンバイに暮らす､2 人の若い女性を主人公にした本作の物語はあくまで控えめだ。仕事、結婚、恋の悩みを抱えた 2 人が、ある事情でムンバイの街から立ち退きを迫られた中年女性の故郷を訪れてみると・・・。

そんな本作は「世界中から愛される、優しさと光が降り注ぐ感動作」だから、タイトルも「私たちが光と想うすべて」に！そう感じられたら、是枝コメントにも納得だが、残念ながら私にはイマイチ・・・。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆本作のチラシには、「世界の映画祭&賞レースを席巻！70 カ国以上で公開決定！」、「第 77 回カンヌ国際映画祭グランプリ受賞」の見出しが躍っている。また、「カンヌ映画祭で出会い　本当は自分だけの宝物にしておきたいけど　こっそりお勧めします。傑作です。」との是枝裕和監督のコメントが載っている。これを見ると、インド人監督パヤル・カパーリヤーの名前は全く知らなかったものの、本作は必見！？

本作の舞台はインドのムンバイ。そして、物語はチラシによると、「インドのムンバイで働く、真面目なプラバと陽気なアヌ　仕事、結婚、恋の悩みを抱え海辺の村へ旅をする、優しさに満ちた感動作」らしいが、さてその出来は？

◆日本では、地方移住の掛け声にもかかわらず東京への人口集中が続き、東京の人口の密集度は高い。その上、近時は外国人観光客の増大や移住者が激増していることもあり、地

価の高騰は異常だ。去る 7／26 の隅田川の花火大会の混雑ぶりを見ると、こりゃ異常！

他方、インドの総人口は 13 億を超えているから、日本の 13 倍。したがって、高層ビルが隣立するインド西部の商業都市ムンバイの人口密度は想像がつくが、本作冒頭の看護師のプラバ（カニ・クスルティ）と同僚のアヌ（ディヴィヤ・プラバ）が暮らしている姿を見ると、「こんな街には住みたくない！」との思いがフツフツと湧いてくる。町の人々も、「どんなに長く暮らしていても、故郷と呼ぶには気が引ける」そうだが、さもありなん！

◆本作の主人公は、前述のプラバとアヌの 2 人。公式サイトを引用して 2 人の立場と本作のストーリーを紹介すると、次の通りだ。

> 二人はルームメイトとして一緒に暮らしているが、職場と自宅を往復するだけの真面目なプラバと、何事も楽しみたい陽気なアヌの間には少し心の距離があった。プラバは親が決めた相手と結婚したが、ドイツで仕事を見つけた夫から、もうずっと音沙汰がない。アヌには密かに付き合うイスラム教徒の恋人がいるが、お見合い結婚させようとする親に知られたら大反対されることはわかっていた。そんな中、病院の食堂に勤めるパルヴァティが、高層ビル建築のために立ち退きを迫られ、故郷の海辺の村へ帰ることになる。揺れる想いを抱えたプラバとアヌは、一人で生きていくというパルヴァティを村まで見送る旅に出る。

同じ大都会だが、東京と北京、上海が全然違う都市であるのと同じように、東京とムンバイは、多くの屋台の存在をはじめとして、町の雰囲気が全然違っている。また、人権意識の強い日本では、労働者の権利や居住者の権利が強いから、パルヴァティのような事態になれば一定の立ち退き料をもらえるはずだが、ムンバイは全然違うようだ。

◆それはともかく、例えば東京と鎌倉が人口密度も町の雰囲気も全く違うのと同じように、ムンバイとパルヴァティのふるさとである海辺の村は全く違うもの。私の故郷・松山は愛媛県では最大の都市だが、郊外電車に 20 分ほど乗って行く私の母方のふるさとは、海のすぐ近くの田舎村だったから、本作のパルヴァティのふるさとはそれとよく似た雰囲気！
そんな感想を持ちながら、プラバとアヌ、そしてパルヴァティという 3 人の女性それぞれの生き方をみていたが・・・。

◆常に生存競争にさらされている男の生き方も難しいが、女の生き方はそれ以上に難しい。そのため、「女の生き方」をテーマにしたさまざまな名作映画が登場するわけだが、カンヌ国際映画祭や是枝監督の評価によれば、本作はそんな視点からの超名作らしい。

さまざまな新聞紙評でも本作のそれを高く評価しているが、残念ながら私には本作はイマイチ・・・。ムンバイと東京の“都市比較”は興味深いが、私の目には本作にみるムンバイに生きる 2 人の若い女性の生き方は、日本の若い女性の生き方とはあまりにも違いすぎる感が！

2025（令和 7）年 8 月 1 日記